

日時

令和2年11月2日(月)
18:30~19:30

場所

高知大学医学部
実習棟3階 第2講義室

《オンライン開催》

緩和ケアweb講演会

申込期限 10月26日(月)

申込方法

メールタイトルは「1102web講演会参加希望」として、本文にお名前、ご所属を記載の上、メール(ial5@kochi-u.ac.jp)でお申し込みください。

開催が近づいて参りましたら、送信いただいたアドレス宛に、web講演会の招待メールをお送りいたします。

※10月28日(水)までに招待メールが届かない場合は、下記までご連絡をお願いします。

オンライン開催ですが、会場に参集しての聴講も可能とします。但し、その時の新型コロナウイルス感染症の感染状況によっては、開場しない場合もございます。

講師

千葉県立保健医療大学
健康科学部

リハビリテーション学科

准教授 安部 能成 先生



がん緩和ケアとしての リハビリテーション・アプローチ

リハビリテーションはカタカナ表記からも分かるように外来語である。日本では、病院の片隅で行われている機能回復訓練の結果、患者が社会復帰を果たすことだと思われている。しかしながら、起源である英語圏では、中世以来の伝統があり、名誉回復、失業者の再就職、犯罪者の更生、災害の復興などの意味が加わり、20世紀の大戦争の時期には、傷痍軍人に対する機能回復訓練と再就職による社会復帰という意味にまで拡大した。

緩和ケアの源流は中世からの歴史を持つホスピスにある。ホスピスも巡礼者の介護に始まり、路上生活者や貧困者の収容施設から、病人の介護施設へととなり、死に瀕した人を看取る場所となってきたのは19世紀の後半からである。病勢の末期にある人を苦しめる症状の緩和に始まるホスピスカケアは、20世紀の後半には緩和ケアと展開し、21世紀の今日、WHOでは緩和ケアはプライマリケアかつ人権問題といわれるまでになっている。

ここでは、社会復帰はおろか機能回復にも困難の度を増す進行期・末期がん患者に対し、どのようなリハビリテーションが展開されているのか、その概念とともに具体的な介入例の供覧を通して、がん緩和ケアにおける目的と役割について明示したい。この場面におけるキーワードは、日常生活活動(ADL)、および、人生の満足度(QOL)である。

司会

高知大学医学部附属病院がん治療センター長 小林 道也

◆お問合せ◆ 高知大学医学部・病院事務部学生課がんプロ担当 TEL:088-880-2799 / (内線:22431)